同窓会報
千南原
第4号
昭和54年1月25日発行
編集・発行
藤枝市天王町1丁目7−1
静岡県立藤枝東高等学校
同窓会事務局

同窓会活動に思う

会長代行　松永臻

新春を迎え、卒業生の皆様方にご挨拶を申しあげます。

槇田会長が昨年逝去されましたので、私が会長職の代行を務めることとなりました。もとより、浅学非才、到底その任には堪えませんが、役員の皆様並びに全卒業生各位の絶大なるご理解とご協力をいただきまして、同窓会の運営が円滑に進められますよう、たとえ劒樹刀山の上でも、或いは鑊湯炉炭の中でも、不惜身命を貫き、精進努力いたす覚悟であります。

今更申すまでもないことでありますが、同窓会というものは、或いは凡そ教育というものは、どんな権力からも独立し、どんな支配も受けないものであると思います。私は、人生で、その人の生き方を凡そ決めてしまういくつかの時点、いくつかの経験があるとすれば、まず第一に、人間味豊かな交わり、生涯の友とめぐり合えた高校時代がそれに入ると思います。ここに藤枝東高同窓会の大きな意義と使命があるのだと思います。

同窓生と一概に言いましても、志太中五年間の人もあれば、志太中から高校まで六年間在学した人もあり、また、高校三年間の人もあり、それぞれ母校に対する意識の差が当然あると思います。しかし、母校はだれにとっても共通の「心の故郷」です。

最近のように、個人が甚だしく専門化され、個別分化され、極地化され、「精神なき専門人」ばかりとなった社会環境の中では、同級生、同窓生という共通の意識にある者同志の集まりは、必ずや、私たちの生活そのものに大きな安心感をあたえるものと思います。従いまして、志太中時代の人たちのクラス会は人数も少ないためによく行なわれておりますが、高校になってからは卒業生の人数が急増した関係もありまして、同級会を行なう機会が少なくなっております。しかし、同じ地区に住んでる気の合った者同志とか、同じクラブの者の集まりなどは、ごく自然にできることだと思います。また、東京の関東支部、清水の藤志会や浜松支部の会合などには、その地区に住んでる人は必ず出席するようにして下さい。こうした会合に出席すると、仕事の上での情報交換などを話し合っている中に、自分という者がどんな状態なのかを知らされ、発奮する時がしばしばあるのも、卒業生の集まりという純粋さからの賜物であります。校歌や応援歌をみんなで歌うと誰もが母校在学中のことを思い出し、次の会合が待遠しくなってきます。

さて、同窓会が歩んだ動向を、この七十年代だけをふり返ってみたとき決して安易なものでなく、多事多難の連続でありました。繁栄の六十年代といわれた時代からわずか十年そこらで私たちからあまりに多くのものが奪いとられ、今、その「揺り返し」にさらされているのだと感ぜられます。これから八十年代のけわしい渦の流れがどう流転してゆくかは予断はできませんが、こうした時代の潮流の中で母校の後輩たちが新しい創造を築こうと謙直に成長してゆくのを後援しようと「同窓会基金」の確立を進めてきておるのであります。各役員の方のご盡力によりまして順調に寄付金がよせられ、別掲のような状況となり、たいへん有り難く感謝いたしております。

しかし、この趣意書はまだ全員の卒業生にまでゆきわたってはおりません。これから若い世代の卒業生の方へ順次連絡を密にしてゆくようにいたします。従いまして、趣意書がゆきました時には、右の事情をご高察いただき、応分のご寄付をお願い申しあげます。

終りに、この一年が皆様方にとって一層のご活躍、ご発展の年となることをお祈り申しあげますとともに、同窓会並びに母校への変わらぬご支援とご協力を賜わりたくお願い申しあげます。

新年を迎えて

学校長　野口太彌

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いします。同窓会念願の基金募集も愈々壱千万円の大台を越えて、誠にご同慶に耐えません。関連して昨年八月、東京支部総会に出席させて頂きましたが、OB各位の活躍する姿に接し、頼もしくも力強く感じました。江島支部長のもと行届いたお世話で、芝のパークホテルに数十名に及ぶ盛況でしたが、なごやかな中にも母校を想う至情の念あふれ、特にサッカーの活躍に寄せる絶大なる期待と激励の嵐を一身に浴びて感激一入なるものがありました。にも拘らず過日の高校選手権大会では思わぬつまづきをして、ご期待に添うことができず誠に慚愧に耐えません。早速新人に改編して再出発を期しておりますので、今暫くお待ち下さい。それにつけても、夏はサッカーとバスケットの全国総体出場に際して、募金等物心両面に多大のご声援を頂きまして、改めて心からお礼申し上げます。

学校は目下、大学受験の一層の成果向上に励んでいる段階ですが、大学進学成績は逐年向上していますので、本年も必ずや頑張ってくれるものと信じております。要は実力があればよいことで、学校を挙げて基礎学力の練磨に寧日がないわけであります。

文化行事のことで一つ、昨秋小川国夫氏にご講演を頂く機会を得ました。北アフリカの印象と題して、コーランの国への鋭い洞察の一端を伺いました。私はそれにもまして、先輩後輩の愛情の繋がりなるものを読みとることができて非常に嬉しく思いました。生徒は氏のことを我等の誇りと思っているのです。翻って日常性の打破はすぐれて効果的に人格形成に大きな影響を与えるものです。それが先輩からの力添えというところに殊更なる意義を認めるものです。

先日も生徒会の新旧会長と懇談して、校長と生徒会長は共に学校を代表する顔だけども、その背後に並み居る千余の生徒こそは学校の手足であり、その手足の働きを規定するものは、実は先輩が培った千南原のバック・ボーンではないのかと語り合ったことでした。その意味において、創立五十五周年の新春に当り、開校の歴史を訊ねて、伝統と校風の中に生きる藤枝東の文化遺産を掘りおこすことが望まれます。前号にも提案致しましたが、高遠なる理想のもとに校史の編纂を企画されるよう望んで止みません。以上報告と感想を述べて新年のあいさつと致します。

一千万円突破　同窓会基金募集に思う

副会長　伊村隆恵

正副会長、事務局も力を合わせ特に卒業生の有力の方々を訪問、特別寄付の募金に余暇をさき、時には終日、時には午后から夜分にかけ、地元藤枝・焼津を中心に逐次輪を広げて駈け廻ってまいりました。また各回層の同級会、或いは東京を始め支部の会合のある度毎に、心臓を強くして一刻の時間をさいていただき、趣旨説明と協力を呼びかけてまいりました。おかげで、紙上ご芳名発表のように皆様の熱意あふるるご厚志が、一千万円を突破と云う嬉しい状況報告のできる結果を得ました。

五十二年九月、募金出発第一日目より数十軒以上の同窓生の玄関をたたきました。その中で多くの方々から貴いご意見を数多く伺いました。静かに拝聴すると、母校を鞭打つ声、会の将来への率直なご意見、誠に心打たるる母校への愛情にその都度たゞ感激いたすと共に、この一大事業に一層の励ましと目標達成への意欲を燃やしました。

紙面の関係でその声を具体的に記述できないことが残念です。しかしせめて皆様の意向を私が代弁して在校の生徒諸君に総括して申し送りたい。会がかかる大事業をやるからということでなくて、先輩の意をすなおに聞いてほしい。

生徒諸君よ、君達が選ばれて藤枝東へ入学した当時の初志を忘れることなく学業に精進すると共に他人に後指さされることのない社会人となってほしい、若い血潮を全身をぶっつけた生活をしてほしい。とかく優秀校の生徒は自己過信に溺れる者が多い、社会への報恩という大切なことを無視する者が多い今日の社会現象を残念に思う。かくなる事なかれ。

最後に、一千万円突破のご協力に感謝すると共に、秋風の吹く頃には初期の目標達成のために一段のご協力をお願い申し上げます。

活発化した同期会支部会

■ことしは焼津で
―十四期生の会―

第十四期会の本年度例会は、十二月二日（土）午後六時から焼津駅前の「角大」で開催された。

幸いに好天に恵まれ、恩師小宮山、村岡、田野の各先生、会員三十名が参集。はじめこそ鹿瓜らしく挨拶をかわし、恩師を中心に記念撮影などしていたが、飲むほどに五十男は、志太中時代の青春にかえり、気勢大いにあがった。

遠く徳島市から馳せ参じて下さった田野先生、東京からかけつけた金原、田辺両君などで、卒業以来の顔合せも多く、一刻を惜しんで語り合い、元気をたたえ合い、恩師の激励のことばや会員の近況報告と、会場は懐旧談に花が咲いた。

やがて九時三十分には校歌・応援歌の大合唱となり、最後の万才三唱とともに会員は再会を誓いつつ散会した。

この会の特色は、毎年一回の例会を藤枝・島田・静岡・焼津の各地区交替に（従って次回は藤枝）確実に開催していること、会員は卒業当時の時勢のために、戦中戦後の歴史の余波をまともに受けて、戦没者をはじめ会員の消息も多彩であること、などがあげられるが、その多くは今や、全国各地で重要な職務の遂行に活躍している。

（竹島清記）

第14期生同級会（於焼津市）

■久々に多数の参加者
―十五期生の会―

昭和五十三年十月一日、藤枝市小杉苑にて、恩師小宮山、山田両先生をお迎えして第十五期生同級会を行なった。久しぶりに参加された方が多く、四十一名にも及ぶ出席者があった。

故人となった池谷守、松永日出男両氏の追悼ののち、懇談に入り、旧交を暖めるとともに母校の発展を祈願して盛会裡に終った。

なお、第十六期生同級会も同日同会場で行なわれ、終りには合流して交換会を開く一幕もあった。

（池谷利夕記）

第15期生同級会（於藤枝市）

■三年ぶりの関東支部会

昭和五十三年八月二十五日、三年ぶりに東京芝パークホテルで関東支部総会が開かれた。二百名にも及ぶ多数の出席者に、はるばる上京した母校の校長、同窓会役員事務局員等五名が加わり盛会であった。欠席者の多くのものが近況報告を書面にしたため会場中央に掲示し、お互い動静を確かめ合え有意義であった。閉会にあたり母校の校歌を高吟し、会員の今後の健闘を誓い合った。

支部長　江島祐二
幹事　中原克己
（事務局記）

■恒例の浜松支部会

恒例の浜松支部総会が十月二十八日に開かれた。鈴木実治郎会長は社用でみえませんでしたが、三十余名出席し盛会でした。松下聡様（十二回）の挨拶で始まり、出席者の近況を話し合う中で、先輩後輩の絆をとき、なごやかな中に再会を期して閉会しました。

幹事　大畑一夫
（事務局記）

浜松支部会（於浜松市）